

第 25 回 OMS 戯曲賞選考経過 —2018 年 12 月 25 日—

九鬼葉子

OMS 戯曲賞での史上初!? 選考会開始わずか5分後に、選考委員から「(受賞作が) 決まった」という声が上がった。最初の投票結果を見た時のこと。例年のように票が割れていない。くるみざわしん圧勝、続いて山本正典だ。今回はスムーズに進む。誰もがそう思った。しかし、そう簡単にはいかなかった。議論伯仲、その過程で追い上げる候補者がいたのだ。やはり例年通り、委員が考え込み、議論が止まる瞬間もあった。来年から選考委員の顔ぶれが変わるため、このメンバー最後の選考会。その詳細をレポートしたい。

関西の新しい才能の発掘と、中堅劇作家にエールを送ることを目的に、大阪ガス株式会社主催、大阪ガスビジネスクリエイト株式会社の運営で開催されている OMS 戯曲賞。扇町ミュージアムスクエアが閉館して 15 年になるが、戯曲賞は継続され、今年(2018年)で 25 周年。関西の劇作家の目標として、また新しい才能との出会いの場として定着している。

今回の応募作は 50 作。うち 18 作が初応募、30 歳未満の人が 12 人と、新しい世代が台頭している。最終選考に残った 8 人のうち、二人が初登場だ。

冒頭、まず投票が行われた。○△×を付けるもので、○は大賞に一つだけ。渡辺えり氏と鈴木裕美氏から、×を付けたくないという希望が出され、?マークにすることとした。

	生田	佐藤	鈴江	鈴木	渡辺
くるみざわ	△	○	○	○	○
棚瀬	×	×	×	?	△
中川	×	△	△	△	?
橋本健司	△	△	△	△	?
橋本匡市	○	×	×	?	△
山崎	×	×	×	△	△
山本	△	△	△	△	△
横山	×	△	×	?	△

全員が○か△を付けた作家として、まずくるみざわしんが○4人と△一人。そして山本正典が△5人。続いて、橋本健司が△4人。中川真一が△3人だ。

各作品の所見を述べるところから始まった。時間は午後1時18分。

棚瀬の階段という設定が意味するものは？

南船北馬の棚瀬美幸は、第15回に『ななし』で佳作を受賞している。最終選考会は5回目の登場。

応募作『赤い靴はいて』は、母や義母が認知症の介護施設に入所している、アラフォー女性5人の物語。母を巡り、確執のある姉妹。義母の介護と娘の登校拒否で、家庭崩壊した中学教師。それぞれの会話が、三つの階段（姉妹の実家、中学校、介護施設）を舞台に繰り広げられる。舞台上には、階段は一つだけで、場面ごとに使い分ける。

渡辺えり氏が評価した。「伸びたと思う。ステロタイプではなく、女性の母への感情を書こうとする意欲がよくわかる。義母が、自分の失態を隠すため、あることないこと、すべて嫁のせいにする、というエピソードが抽象的なので、細かく書くほうがおもしろい」。

生田萬氏は「普遍的に抱える問題。親が弱っていく中、アンデルセンの赤い靴に踊らされていく女達の、狂騒的なダンスがブレイクすることを期待して読んだ。だが、親を放っておいて自分がダンスしているという場面はなく、その意味ではドラマが成立していない。階段に女達を配置する絵はきれい」と、評価しつつ指摘した。

佐藤信氏は「×を付けたが、全否定するものではない。わからないところがあり、意見を聞きながら考えたい。階段という設定が演劇的に意味するものが何なのか？ 僕には必然が感じられなかった。自己実現のため、社会的問題を扱うのではなく、自分の位置をしっかりと置いて、書いてほしい。そろそろ認知症の側から書く人がいないのだろうか？」と疑問を投げかけた。

鈴木裕美氏は「全作品について感じたことを話させて頂きたい。母親と金の話がどの作品にも入っている。そして、どの戯曲も『誰のせい』と言いたいのが伝わる。橋本健司さんだけは違うが、それ以外の作品は、丁寧に、あるいは乱暴に、誰のせいと考えるかを描いていると思った。棚瀬作品は一つ一つのエピソードが簡単に思い付いたことだけで書いている、と失礼ながら思った。人物の苦しさが、ひとごとと感じてしまう。深く、丁寧に対象を扱っていないように思った」と指摘。

鈴江俊郎氏は「階段で始まるので、期待した。いつ階段に収斂するのか、と読み進んだが、何もなかった。三つの場面が錯綜し、敵意が相手に露骨に伝わる台詞があり、現代社会では日常が悪意に満ちている、と言外で告発しているのが新しい」と、指摘しつつ評価した。

階段の演劇的意味合いについての疑問が続き、授賞対象外となった。

山崎はテクニックがボディに達してほしい

悪い芝居の山崎彬は、第17回に『嘘ツキ、号泣』で佳作を、第24回には『メロメロたち』で大賞を受賞している。最終選考会は7回目の登場。『毘々』は、上司と揉めて会社を

クビになり、婚約者からも捨てられた男・羽尾が主人公。自殺しようと思い、最後の夜に名も知らぬ女の家泊まる。翌朝目を覚ますと女の姿はなく、上司と元・婚約者の死体が転がっていた。「俺は、罨にハマられている」。自分をハマた人物への復讐を決意し、消えた女を探す。

生田氏は「威勢のいい男気を堪能させる劇と思うと楽しめる。だが、それ以上の関心は持てなかった。いつもは、運命論に抗う絶望的叫びがみなぎる芝居だが、今回は骨太の作品ではない」と指摘。

佐藤氏は「徹底的に作り物の世界をテクニカルにまとめようとしている。それが伸ばした腕より先にある相手のボディまで到達していない。いろんな情報を持ち、仕掛けも多いのだが、話を作ってもらいたかった。切実感に疑いがある。『すべてが罨』というのは、『夢落ち』と同じ。それが動機とすれば、他人が関心を持ってない」と指摘。

渡辺氏は「釈迦の手の上に過ぎない、ということを描きたかったのか。(通学路の真ん中に引かれた白い線を、歩いて帰ったエピソードの中で)『この線から落ちたら、死ぬことになってるし』というところが、釈迦の手の上ということを表すなら、夢落ちにはならない。ただ、釈迦の手とは、何だろう？ 人物の名前が仏法から取られているが、そういうところがうまくはまっていない。釈迦の手の上を歩いているようには読めず、最初に読んだことから外れていった。また、爆発とは、何を意味するものか？ 第三次世界大戦なのか？ 読みこなせなかった。18年前に何があったのか？ そのでの爆発が、メビウスの輪のように繰り返しているのだろうか？ 深読みが出来なかった」と語った。

鈴木氏は「いつもはチューニングを合わせにくい作家なのだが、今回はするする読めた。ということは、いつも評価される委員にとっては、物足りなさが残る作品なのではないかと思った。いつもはチューニングできないなりに、荒々しい感じが魅力だと思っていたが、次の段階に行く途中なのかな。神様のせいだ、ということで会話が積み重ねられていくところが多かった」と語った。

鈴江氏は「『人生はドッキリや』『神さまが仕組んだ罨』『復讐してやる』と言って、『ラストシーン、本番』と”声“が言う。それが恐ろしい設定だと思い、魅かれた。最初に『中途半端な街』と書かれていて、街の中途半端さを鋭く突いてくれると期待した。今、近郊住宅地はどの街も一緒。僕が育った街も含め、隠れてチュウをする場所もない。そういう都会の現状を突くのかと思ったら、描かれているのは、とてもおもしろそうな街に思えた。焼肉を出すスナックが出てきたり。生きてること自体、中途半端と拒否感を持ち、神の罨の中に住んでいることと、感覚的につながるのかな。その時々描写には、それがなかった。志には共鳴するが、もう少し描写を探す方がよい」と指摘。授賞対象外となった。

中川はト書きの意味の再考を

最終選考会初登場の中川真一は近畿大学出身。2011年に遊劇舞台二月病を旗揚げし

ている。『Round』は、元・ケースワーカーの男が主人公。生活保護を受ける人がパチンコ依存症となる理由を探るため、パチンコに通ううち、自らがパチンコ依存症となり、失職した。在職中、児童虐待死を防げなかった挫折を抱え、失業して5年が経つ。家庭も崩壊した。娘の婚約者と食事会をすることになり、金の工面のため、さらにパチンコに没頭する。

生田氏は「僕自身パチンコ依存症だった時期もあり、テンポ感がパチンコ屋にいるみたいだった。ただ、戯曲作法を無視した書き方。役名が何も教えてくれないし、ト書きが機能していない。ケースワーカーがパチンコをしている場面に、過去に出会った人々が出てくるのだが、実際の舞台をイメージすることができなかった。赤が緑に変わり、数字が替わり、リーチ！という展開はおもしろいが、実際の舞台でどう楽しめるのかが戯曲からはわからず、僕は躓いた」と、評価しつつ疑問を呈した。

佐藤氏は「僕は△を付けたが、○に近い。パチンコを体感的に捉えている。ディティールでは、自宅を訪ねてきたケースワーカーを早く帰らせたいと思っている主婦が、『洗濯物取り込もう思いますねん』という台詞感覚的的確さ。一つ一つの拾い方がおもしろい。戯曲としては荒いが、演出家としてやってみたい作品。ケースワーカーのパチンコの劇として、おもしろい。あのパチンコ屋の空間の中で社会問題を考える姿勢を評価したい」と推した。

渡辺氏は「おもしろかったが、読むより、舞台を見たほうがわかりやすいのかもしれない。私はパチンコをやったことがなくて、リーチという言葉の意味すら知らないが、知っている人にはおもしろい仕掛けで書かれているのだろう。中毒と虐待を、パチンコの中でかけているのだろうか？ 瑞穂という人物を、ここまでいじめる意味は何なのだろうか？ 読むほうが苦しくなることを利用して書こうとしているのだろうか？ 掴めないことはあったが、仕掛けと設定はおもしろい」と語った。

鈴木氏は「△だが、○に近い。ギャンブルにはまる人々を描く作家は、ある程度頻繁に出てくる。ギャンブルにはまる精神状態を書く人はいる。だがこの作品は、パチンコそのものが書きたいのだろう。中毒の人には、本当に世界がここで描かれている通りなのだろう。もう少し丁寧に書いてくれていたら、パチンコを知らない私も、パチンコの世界に連れて行ってもらえたかもしれない。取材を相当していらっしゃる。次が読みたい、と、とても思った。強く思った。楽しみ」と評価した。

鈴江氏は「子供を愛せない母親が、子供に向かって『あんたのこと好きになれへんねん』と言った時、子供が『私もほうれん草好きになれへんもん』と返す言葉が悲しい」と評価、渡辺氏も「残酷」と共感した。鈴江氏は続けて「負けるヒーローだけでなく、例えば、勝ちそうなヒーローも出すなど、矛盾する何かを入れると、その比較でさらに悲惨が浮き立つのでは」と指摘した。

ここで生田氏が再び語る。「選考委員を辞するに当たって、伝えておきたいことがある。作者が演出を兼ねる場合の弊害として、書きながら演出がわかっている点である。ト書き

や役名が丁寧でなくなることがある。上演の後、賞に応募する前に手を入れたほうがいい。それについて、渡辺氏も「他の人が演出しやすいよう、ト書きを書くほうがいい」。鈴木氏も「世界に向けて、『僕が書いた』と言いたいなら、書くほうがいい」と賛同した。

さらに佐藤氏が「ト書きでないト書きが多い。ト書きの意味をどう捉えるのかを考えなければ」と語り、生田氏が「そこまでの意識を持って応募している感じのしない作品が多い」と付け加えた。

中川作品は保留となった。時間は2時。ここで15分の休憩が入った。

子供は生まれてから死んだのか

胎児で死んだのが争点の

橋本匡市

万博設計の橋本匡市は、最終選考会2回目の登場。『駱駝の骨壺』は、上方落語『らくだ』を下敷きにした密室劇。大阪・ミナミの繁華街から少し離れた場所にある1DKのアパート。夫婦は子供を「らくだ」と名付けるが、どうやら子供はすでに死んでいる。夫は有名通販サイトで骨壺を注文する。夫は失業中で、妻から渡された家賃も通販で使い果たしてしまう。

鈴江氏から疑問が示された。「戯曲として読みづらい。台詞を言う人の名前が間違っているのではないか？と思うところがあった。(注：『女』という人物は、妻の母。『子』という人物は、妻の子供時代を示し、『女』と同人物が演じる指定がある)。40ページのト書きに『子』は妻になる、と書かれていて、『女』と『子』が台詞を合唱する。その直後、今度は『女』と『妻』が台詞を合唱する。『子』と『女』は同人物が演じるはずなのに、合唱ってなんだろう？ ト書きをちゃんと書いてほしい。理解が難しかった」。それに対し、鈴木氏が「同じ人だけど、言い方を変えろ、という意味ではないか？」と答え、またほかの委員から別解釈も述べられた。鈴江氏はさらに「同じ人がやる意味がわからない。また、子供を亡くしたことを受け入れられない妻に、ダンナが、Amazonで骨壺を買った、とデリカシーのない言葉を言う。悪趣味な会話なのだが、それが魅力と捉えないと読めない。ビールを飲んで酔っ払う場面があるが、酔っ払うまでの時間を舞台上で過ごすのか？ 歌を3番までフルコーラスで歌うのだが、どう過ごすのだろうか？」と疑問を呈した。選考委員が細部まで読み込み、舞台を何とかイメージしようとしていることが伝わる。今回は、上演台本と戯曲の違いについての議論がたびたび行われた。上演台本は、舞台を作るためのものであり、舞台を「見る」人のためのもの。それに対し、戯曲は、「読む」ためのもの。上演台本をそのまま応募しなくてもいい。第三者が戯曲を読んで、舞台がイメージできるよう、応募する前にト書きなどを推敲してもよいのだ。

渡辺氏は「上方落語の『らくだ』は、死者をどう躍らせるか、という残酷性がベースにある。河豚に当たって死んだ男が(長屋の人達により)踊らされる。それをどう演じるの

かが、上方落語の力の見せどころで、伝説の落語である。死者を滑稽に扱う、という大本を、もし追究して書こうとしているなら、意図的に書いておられるので、よいと思うのだが、そこをあえて書こうとしているのかがわからなかったので、△にした。落語では、死者で大笑いさせる状況を描いているが、どのようにそれとダブらせて読んだらいいのかわからなかった」と、評価しつつ、疑問を呈した。

鈴木氏も「落語では、家賃を踏み倒した男が、河豚を食べて死ぬ。この作品で死んだ子供には罪がない。家賃を踏み倒したのは、親である」と、疑問を呈する。

佐藤氏は「落語のパロディがもし作者の頭にあったとすれば、もともとは、でかくて得体のしれないもの=凶体が大きい乱暴者で、『らくだ』と呼ばれている男の死体が、弱そうな人達に踊らされているものだが、この作品では、未熟な子供にらくだの役割を担わせている。それがイノセントな扱いになっているのには、疑問を持つ。純粹なのだ、と捉えるのは、どうなのか。月の砂漠とらくだ、という作られたイメージがある。『らくだ』にどんなイメージが託されているのか？ 胎児という名前なら許容できるのだが」と疑問を呈する。

さらに佐藤氏は続けて「墓石を買う前半と、後半の展開のバランスがよくない。もっととんでもない世界に行けた作品かもしれない。33 ページに『らくだ「by ウィキペディア」』と書かれているが、これが台詞になるのは、怖い」と語った。それに対し、生田氏は「『らくだ』のパロディとは違うのではないかと？ 死んだのではなく、生まれてこなかった子供への思いを綴ったのだと思う。らくだのこぶに赤ちゃんが入っているはずが、ほんとは水しか入っていなかった。らくだには、生まれた時はこぶがない。袋を持って生まれてきて、そこにだんだんたまってくるものは、果たせなかった願いや夢、必要とされずに捨てられたもの。羊水を漂う胎児への思いで結ばれた夫婦と思って読むと、そこはかとないう夫婦の情愛に心を打たれた」と絶賛した。

その話を受けて鈴木氏は「生まれていないのだとすると、人物が本来言っただけとはいけないことを言うのは、わかります。作者が並々ならぬ思いを込めて、大阪物語を書いたのかもしれない。いろんな思いが降り積もってできたのが大阪だということが描かれているのかもしれない」と語り、渡辺氏も「そうだとすると、42 ページの母と子供の会話の意味もわかる。ラストで子供が海岸で波の音を聞きながら『…はじまる…動き…はじまる』と語るのには、海深くに消えたことを表しているのかもしれない。海は羊水だと書いているのか」と語る。選考委員が一言も読みもらず、わからなかったところを考え抜いて、何度も読み返している熱意に感嘆する。その上で、他の委員の所見を聞いて、理解を深めていく過程が、選考会の有意義なところだ。

ただ、事前にこれだけ選考委員が何度も読み返されて、なおもわからないところがあったのは、勿体無い気がする。やはり応募の前に、伝わるように工夫する余地があったのかもしれない。

司会の小堀純氏から「大阪は人の海であり、猥雑な街。相当ロケハンして書いている」

と補足説明があった。さらに生田氏から「前の作品では、ト書きが不親切だったが、今回丁寧に書かれていることに感動した」という言葉もあった。

この作品は保留となった。時間は2時38分。

横山は取材不足が課題

i a k uの横山拓也は最終選考会6回目の登場の実力派。『肅々と運針』は「命」に直面した二つの家族が描かれる。築野家の長男は41歳だがバイト暮らしで、母と実家に住む。弟は結婚している。癌に侵された母を見舞うと、病室に見知らぬ初老の男がいて、母は彼と相談した結果、手術はせず、穏やかに最期を迎えることを選んだという。戸惑う兄弟。一方田熊家の夫婦は、子供を作らないと決めていたが、妻が妊娠した可能性に気づき、出産を巡って夫と意見が食い違う。両家の会話の間に、二人の女性が肅々と運針しながら時を刻む。彼女らは、築野家の母と田熊家のお腹の子供だった。

鈴江氏は「築野家の次男が結婚していて、兄が子供を作れと言う。今どき、よく聞かれる会話で身につまされる。その上で、語られる内容に親近感が持てず、この人物達と、お友達にはなれないと思った。母の死を受け入れようとする兄の変化を描いた作品だと思って読んだのだが、それでも受け入れにくい。生活の現実からジャンプして、次に行こうよ、という励ましを世間に与えられるのだろうか」と語った。

鈴木氏は「(運針する二人の女性の話に出てくる)桜の木が倒される話に何らかの真実があるのだと思うが、それが全体とどう有機的に結びつくのかが、ずっと流れてこなかった。どうやって生きて行くのか、ということに対し、戯曲の中で描かれていることが、本当にそうなのか?本当にこれが書きたかった唯一の正解なのか?がピンとこなかった。棚瀬さんの作品でも、姉妹の会話について、そんな感じ悪い会話をしたら、二度と会えなくなるよ、ということが書かれていて、それが意図的かどうかわからなかったのだが、この戯曲も、フォーカスを合わせるのが難しかった」と語った。

それに対し渡辺氏は「私は横山さんの作品の中で、一番好き。いつもは、ご自身の立場がはっきりせず、上からの視線を感じたが、今回はそうではない。49ページの田熊家の妻の台詞に『私は見張られてんねん』という言葉があった。よく書かれたな、と思う。自分が縛られて自由にできないということを表した、この台詞を評価したい。糸と結という認知症の二人が、桜の話をしている所もおもしろかった。ソメイヨシノは寿命が短く、80年しかもたない。本来はもっといろんな桜があったのに、一斉に桜が咲くよう、全部ソメイヨシノに植え替えられ、それが80年しかもたないという皮肉。日本の風習を描いていると思う」と評価。

それに対し鈴木氏から「簡単には扱えない問題を書いておられる。女が子供を産む決意をする話を、軽やかにお書きになっている。そんなにしゃべるだろうか?しゃべれないこともあると思う」と指摘。渡辺氏も「本当に女のことを考えて書いているわけではない。

産みたくない理由も、こんなに簡単ではない。こういうものだと想定して書いておられる」と指摘した。

佐藤氏は「好感を持った。劇の素材を丁寧に選び取っている。ご都合主義な飛躍もない。普通の人って、こういうことなんだよ、と捉えようとしている。OMS戯曲賞は、時代をよく描いてきた。今は貧乏と介護を描く作品が多い。ある時までは全くなかったテーマ。惜しいのは、家族の話と、認知症の老人二人が縫物をしている世界が混合する、その仕掛けがうまくいっていない」と評価した。

渡辺氏はさらに「子宮筋腫だと子供が産めない、というところは、もう少し慎重に書いてほしい。また、妊娠したかもしれない妻が、夫と二人で楽しく暮らしたいから産みたくないと言うところも。先入観で書く癖がある。偏った見方で書くところはある」と、取材不足を指摘。生田氏も「妻が職場で努力し、課長代理まで行った。それが出産と育児で途絶えるという問題は、切実だと思う。ただそれが、トイレトペーパーのホルダーがかわいいという話と等価で考えられているのは、どうだろう（注：妻は家の内装や家具、小物に至るまで完璧にしつらえていて、そこに子供のキャラクターが入ることを嫌がっている）。死ぬ命と産まれる命を等価で扱うのはいい。ただ、健常者が権利を握っている無理はある。問題を抱えた家族がいる中、時が進んで行き、そして縫物をしていたのが、築野家の母と、田熊家の胎児だったと、最後に言われても、腑に落ちない」と指摘。佐藤氏も「そこがうまくいっていない」と語り、授賞対象外となった。

橋本健司の手書き台本は ヒーリング効果

桃園会の俳優で、近年劇作家としても頭角を現す橋本健司は、『また夜が来る』で第23回佳作を受賞している。今回は、奈良の和菓子店「中西与三郎」で上演された「町屋演劇」の台本『はつゆき』を応募。こぎくちゃんという少女と、おねえちゃん、ガイドさん、運転手さんという4人の登場人物が、リンゴ農園を営む家族や、東京で夢を追う男と恋人など、様々な役を演じていく。

鈴木氏は「読んでいて、気持ちがいい。冒頭、ガイドさんが劇場までどう来たのかの道のりを説明するところが、なんてかわいらしい。この世界観を、手書きで、この字で読む時間が楽しい。やさしい気持ち。幸せな感じがする。劇場でない所でやっていらっしやる。観たかった、と強く思う。感覚的に好き」と語った。

渡辺氏は「前の作品は、あったかくて好き。今回は『50歳を過ぎた身、徹夜はできません』というところが気になった。50歳を過ぎたら、年を取っていると思っている。それを笑わしてくれるならいいのだが」と指摘。

佐藤氏は「台詞がいい。ただ、こういう所（和菓子店）でやっていて、見ると想像通りのことが行われる。それをよしとするのかどうか。今、このような演劇行為が増えている。

観光の概念として捉えかえす参加型演劇など。演劇でフィクションを作るのはどのようなのかを考えてみる必要がある。奈良のお菓子屋さんでやる。導入にガイドさんの説明がある。そういうものだろう、という以上のものが見られるのかどうか。破綻したものが出て来るとか、この秩序感に合わない人が出て来るとか、フィクションである以上、それも必要なのではないかと指摘。

生田氏は「気持ちがいいのだが、書き方がわかりにくい。劇場までの道のりを語る導入が長いと、物語が動き出さない。奈良バスツアーの外枠は必要なのだろうか？ それかわかりにくくしている。3回読むと、シンプルな構造だとわかったが。運転手が3役するのだが、役名が全部運転手で、わかりにくかった。普通に書いてもよかった」と指摘。

さらに鈴木氏が「役名がすべて運転手さん、とか、こぎくちゃん、とか、おねねちゃん、とか、『さん』や『ちゃん』付けで、戯曲の最後まで略さずに書かれている。この手書きがヒーリング効果」と、手書き台本の気持ちよさを分析。

鈴江氏も「手書きが気持ちよかった。平凡で気持ちいい。読む人を威嚇しない。この町屋でどうやるのか。天井が高く薄暗い場所。小さい所で小さくやる芝居を知っている。最後に白い雪が降る。どこかで見た場面だと全員が言うことをあえてやっている。真っ向から挑戦している」と評価。

最後に司会の小堀氏から「50歳で徹夜ができないというところは、決めつけではなく、取材して書いている。普遍的な言葉にはなっていないが、自分の周りにいる人、作者自身が見た人のことを書いている」と補足。鈴木氏も「適当なことをお書きになっているわけではない。誠実」と評価した。

授賞対象外となった。時間は3時19分。

山本の遊び感覚は 日本には珍しいSF

コトリ会議の山本正典は、最終選考会初登場。『あ、カッコンの竹』は、竹やぶの中が舞台。心中するつもりで竹やぶに踏み込んだ夫婦。自殺を仄めかす男と、彼についてきた後輩。事故により不時着した地球外生物の兄妹。そして竹やぶに住んでいる母（野お母さん）と二人の娘。彼らが出会い、交わされる会話から、それぞれの思惑が浮かび上がる。

鈴木氏は「わくわくした。竹やぶから出ないで、宇宙人が出てくるなど、嘘の話を書かれているのだが、そこに責任を持って、丁寧にイメージして書いておられる。次の作品も読みたいと思った」と評価した。

渡辺氏は「おもしろく、捨てがたい。宇宙人の妹が宇宙船のハンドルを握り、兄が何をしているのかが地球人には全くわからない。こういう遊びは好き。遊びなのか、深いことを考えて書いておられるのかわからなかったが、深いのかもしれない。台詞がおもしろい。役者がしゃべっているのを見てみたい。『自分の生きてきた味がどんなのかは 気になる

るわ』という台詞がいい。自殺した人に対する鎮魂劇を書きたかったのではないか。人生は自分の肉を食うようなもの。そこを捉えて、確信して書いている切ない芝居。日本語でない台詞もある。『え大丈夫ですかあなた』の後の『あだっば』とか。ト書きも好き。『これが 朝の光』の台詞の後の『同じ景色を眺めた』というト書きがいい」と絶賛。

佐藤氏も「台詞の展開がおもしろい。しゃべると絶対おもしろい。役者が色づけることで生きてくる。話としてうまく出来上がっているわけではないが、竹やぶ全体が1個の生命体、という捉え方に着目したのが成功している。役名の『野お母さん』など、語感の感覚がいい」と評価した。

生田氏も「同感。おっしゃられたことで言い尽くされている。引き込まれていく」と評価。

渡辺氏はさらに台詞を引用しながら「グロテスクなものをあつたかく包み込んでいる」と評価の言葉を付け加える。

さらに生田氏は「このおバカぶりは何だろう、と考えた時、”おバカSF “とも呼ばれる『銀河ヒッチハイク・ガイド』（注：イギリスのスラップスティックSFシリーズ）を思い出した。BBCラジオが最初で、その後ノベライズされ、テレビにもなり、最後が舞台だった。モンティ・パイソンにも通じるところがある。この手の遊びはイギリス人にしかできないと思っていたが、日本でやる人が出てきたことに感動した。『ヒッチハイク〜』は舞台が最後だったが、日本ではいきなり演劇として出てきたことにも感動した」と絶賛。

鈴江氏が「相手の言っていることを受容して返す、台詞の感じがいい」と語ると、すぐに渡辺氏が「泣ける台詞があった。『やっぱりあなたと一緒にいたい。ずっと鳴ってる目覚まし時計をとめてほしいの』という台詞。死者が言っていると思うと泣ける」と、再び引用して評価した。

鈴江氏は続けて「死にたいと思っている人達の甘い会話。自殺を止められない葛藤が延々と続き、最後の脈絡が、作者の中では意味がはっきりしているが、こちらには伝わりづらい。甘めに想像して補って読むと泣ける」と、評価しつつ指摘した。

鈴木氏が「今後、ものすごくおもしろいものを書く人だと思う」と付け加えて、保留となった。時間は3時34分。

くるみざわ作品の希望の所在が論議に

劇団光の領地のくるみざわしんは、『ひなの砦』で第22回OMS戯曲賞佳作を受賞している。最終選考会は2回目の登場。応募作『同郷同年』は、「日本の劇」戯曲賞2016最優秀賞を受賞し、「日本の演劇人を育てるプロジェクト」として、公益社団法人日本劇団協議会主催で上演された作品。

同じ郷で生まれた同い年の男性三人。彼らは核廃棄物の最終処分場誘致を目指したが、住民投票で惨敗。その後農家の田切は電力会社に就職、他の地域での処理場誘致に成功し、野心を持つ。薬局を経営する谷上は、町立病院の閉鎖により経営難に陥り、田切と組んで再び処理場誘致に乗り出す。だが、他地域で事故があり、汚染水が地下に流れ込む。電力

会社勤務の中本は、誘致に反対するが、権力構造に追い詰められる。

渡辺氏は「おもしろかった。デフォルメしつつ、リアリズムからファンタジーに持っていく。イプセンを彷彿とさせるが、イプセンの『民衆の敵』よりおもしろいのではないかと思った。登場人物は3人だけ。その性格を書き分け、デフォルメしていることに説得力がある。日本の縮図が描かれている。男の友情の微妙さ。農業への視線。GHQの方針で踊らされ、原発問題に行き着く。同じ場所だけでよく書けたと、驚きを感じる」と絶賛した。

佐藤氏も「誇張に効果がある」と評価しつつ「もう一展開ほしかった。この構図からはみ出してほしかった。フィクションでいいから、劇に希望の余地が欲しかった。ないものねだりだろうか」と指摘した。

生田氏は「福島の事故の除染をした廃棄物処分場のことかと思ったのだが」と語るが、渡辺氏は「次の事故のこと、近未来を書いているのだと思う」と答える。

生田氏がさらに「反・原発は代替エネルギー案が出せるが、廃棄物処理は、どこかが引き受けるしかない。進んで引き受けようとする男の話で、希望が見出せない。徹頭徹尾、重い話」と語ると、渡辺氏は「日本がこのままではこうなるぞ、とパロディにしている。笑える話だと思った。大笑いになるくらい警鐘を鳴らした作品」と述べる。

鈴江氏が「今回、劇画調の誇張が功を奏している。迷惑施設を受け入れる時、それが誇張とは言えない人々がうごめく。よく取材している。納得できる。ただ、処分場誘致に反対した、電力会社の元・社員が、落ちぶれて妻子にも逃げられた、と転落を強調しているが、実際はもっと悲惨で、奥さんも逃げられない状況かもしれない」と指摘した。

鈴木氏は「場所設定は同じ薬局の待合だが、場面ごとにきれいになり、次に汚くなり、と経過が描かれている。また田切が最初は『どうってことのない普段着』で現れ、次の場面では上質なスーツ姿になり、最後は汚れた野良着に泥のついた長靴で現れるので、落ちぶれたのかと思いきや、議員になっていた、という変化で、楽しませようという意識も伝わる。題材の扱いに責任を取っておられる。いい俳優がきちんとやることで、希望や上演の意図が伝わるのではないかと思った」と評価した。

渡辺氏は「都会の人が使う電気を福島が作っているということを、ちゃんと書こうとしている」と評価。

佐藤氏は「失敗のドラマ。どこで失敗したかをあと一步ていねいに描くと、希望のドラマになる」と期待。保留となった。これで全作品を一旦語り終えた。時間は4時2分。15分の休憩の後、投票することになった。

議論伯仲の佳作

保留となったのは、くるみざわ、中川、橋本匡市、山本の各作品。この中から大賞と思う作品1作に○を付けることになった。

結果は佐藤氏、鈴江氏、鈴木氏、渡辺氏の4人がくるみざわ。生田氏が山本に票を投じた。

司会から生田氏に、くるみざわ大賞で異議がないかの確認がなされ、異議はなく、大賞が決定した。4時23分。

続いて、佳作の投票に移る。残りの作品から、1作に○を付けることになった。結果は、中川作品に佐藤氏と鈴江氏、山本作品に鈴木氏と渡辺氏、橋本作品に生田氏。選考委員から「割れました」の声が上がった。再び議論が始まった。

佐藤氏から「山本作品もいいが、山本さんは大賞を待ちたい。中川さんは、書き続けてほしいという思いで佳作に推したい」との意見を述べた。それに対し、鈴木氏は「中川さんは、お書きになります」の声。

ここで生田氏が「僕が山本さんに移ります」と述べ、山本作品が3票となった。これで佳作が決まったのか、と思ったが、まだ議論が続く。

鈴江氏が「中川作品は、舞台に幻惑される度合いが強い。圧倒的情緒で包まれそう。山本作品は繊細で、役者が力むとあかんかも。上演になりやすいのは中川作品」と見解を述べた。

鈴木氏は「どちらもいい作品」と語り、渡辺氏は「世界観は、山本さんがやさしい」と語る。

佐藤氏は「中川作品は、ケースワーカーがパチンコにはまり、同時にケースワーカーとしての呪縛に陥っていく。そこがうまくいっている。山本作品は、舞台の『絵』として、もうひとつ具体的なイメージが出てこない。台詞のセンスはとてもしっかりいので、また違う世界も見てみたい。もう一展開したらすごいものが書ける作家と思う」と、山本作品を評価しつつ、中川作品を推す。

渡辺氏は「山本作品は想像できる。宇宙人が出てくるが、架空ではなく、身近なことの暗喩になっている」と山本作品を推す。

鈴木氏は「中川さんは、自分ではないところに耳を澄ます。山本さんは、ご自身の世界に耳を澄ます。描く世界も方向も違って、好みが入ってくるかもしれない」と語る。

ここで渡辺氏が、山本作品の朗読を始めた。「(宇宙人の兄が)『いいんだ さあ 行くのだ妹よ』、ここおっかしいけどねえ (笑)。妹が『お兄ちゃん 地球から攻撃を受けたわ。落ちるわ』。その後のト書きが『妹はハンドルを握る。兄は何をしてるのか、地球人にはわからない』おっかしい (笑)」と、おもしろさを、声に出して示す。応募作が大女優によって朗読される選考会は、壮観である。

佐藤氏は「のびしろは中川さんのほうがあるのではないかと。山本さんは、これである程度の完成形」と、佳作には完成度より、のびしろを重視する考え方が示され、中川作品を推す。

鈴木氏が「完成を祝福するか、期待を込めるか。私は、今、現実にある美しさを讃える方がいい」と、山本作品を推す。

ここで議論が滞った。もう1回投票するか？という声もあったが、投票はしないことになった。

佐藤氏が「作品として、よいものが大賞。佳作は応援の意味がある」と述べる。

ここで司会から「今は三人が山本作品に入れている。二人が中川作品」と確認がなされ、山本作品が佳作であることに異議は出なかった。ここで、山本作品の佳作が決定した。4時45分。選考会開始から3時間35分が経過していた。

授賞式～選考委員は自分の作品を「担保」に議論する

授賞式では、所用で不在のくるみざわしん氏に替わり、作品のリーディングに出演した俳優・藤田和広氏からコメントが代読された。「OMS戯曲賞大賞受賞を嬉しく思います。上演まで4、5年かかった作品で、多くの人に関わって頂きました。受賞によって思い上がり、名だけ知られてつまらない作品を書く作家にならないよう、書き続けます」。

山本正典氏は「このような立派な賞を頂いて、嬉しいです。役者やスタッフ、劇場の方など、皆さんと一緒に喜ぶことが、演劇の楽しいところだと思っています」と語った。

主催者代表として、大阪ガス株式会社理事で近畿圏部長の本多文雄氏から「扇町ミュージアムスクエアが閉館して15年が経ちましたが、今年も50作の応募を頂き、この賞が目されていることをありがたく思います。最終候補の8名中6名が、過去にも最終選考に残った実力者。すべて独創性やバラエティに富んだ作品で、OMS戯曲賞らしい選考会だったと思います。今後も関西演劇界に寄与したいと思います」との言葉があった。

公開選評会では、今年で任期終了となる選考委員に花束が贈呈された。第1回から25年間選考委員を続けられた渡辺えり氏、20年間続けられた生田萬氏、15年間の鈴江俊郎氏。

渡辺氏は「長い間ありがとうございました。審査は必要悪で、誰かが引き受けなければ、若い人が育たない。批評した言葉の内容によっては、一生恨まれることもあると思いますが、命がけで審査しています。発言したことが、すべて自分に返ってきます。自分の命を一番下において、命がけで読まない失礼であると思います。最初は女性の選考委員が私しかいませんでした。岸田理生さんや如月小春さんが亡くなり、男性社会の中、女性の立場で書く人がいない、とか、男性の脳で書いている、と毎回言いながら、男性社会と闘ってきたつもりです。女性作家がOMS戯曲賞から育ってくれたことを嬉しく思います。大阪ガスさん、演劇の応援をして下さって、ありがとうございます。大変な時も支えて下さった小堀純さん、感謝いたします。頑張ってください」と語った。

生田萬氏は「20年もやったんだな、と思います。関西の演劇人とお友達になれたことが嬉しかったです。後進に譲る時が来ました。20年間ありがとうございました」とコメント。

鈴江俊郎氏は「15年間という長さを感じません。苦行です(笑)。読むのがしんどいという意味ではなく、書いた人がいて、演じた人がいて、劇場の人々がいて、台本は書いたら

すぐに責任が生じる仕事です。誰かが刺激し、動かされればよいですが、『簡単に批評しやがって』と思われることもあるでしょうし、どこまでいっても、うまくいかない。辛い気持ちで終わります。いつか、辛い日々が懐かしくなるでしょう」と語った。

第1回から就任し、今後も継続する佐藤信氏は「25周年という大変なことなのですが、賞を続けようと思っている人、助けようと思うスポンサー、賞を目指して書く人がいる間、誰かがお手伝いする必要があります。常に一言一言間違えられない。充実した時間です。もう一度『1』に戻り、OMS戯曲賞は何なのだ？と考え直します。ここほど、自分の作品を担保において議論する場はない。高みからではありません」と語った。

確かに、選考委員達は応募する作家と同時代の作家・演出家である。上から目線ではなく、覚悟を持って関西演劇界活性化のために、辛口のことも含めて発言している。私事ではあるが、演劇評論家の私自身、毎回議論を聞きながら、自分自身が「問われている」と感じる。私達は関西の新しい才能を十分に発見できているのだろうか？と。いや、まだまだ足りない。才能を世に知らしめていくのは、メディアの責任である。最終候補に残っていない作家や、まだ応募したことのない作家の中にも、よい舞台を作っている人はまだまだいるはずだ。委員達の言葉に叱咤激励されているのは、劇作家だけではない。メディアの仕事も問われている。

私は、来年からの新しい選考委員の佃典彦氏、土田英生氏、樋口ミュ氏、そして委員継続の佐藤信氏、鈴木裕美氏に、新しい才能と中堅劇作家の活躍を伝えられるよう、一層身を引き締めなければならない。そして、劇作家達はぜひ積極的に応募して頂きたい。受賞が叶えば勿論よいが、たとえそうでなくても、同時代の先輩劇作家達の言葉は、必ず明日の自分につながるはずだ。

渡辺えりさん、生田萬さん、鈴江俊郎さん、長い間、お疲れ様でした。関西演劇界、ひいては日本の演劇界の未来のために、本当にありがとうございました。

(文中一部敬称略)